

設立趣旨書

人生で最も多感だった14歳の夏、私は「強迫性障害」を発症しました。外から見れば取るに足りない小さなことが気になり、誰かの指示を受けたかのように同じ行動を繰り返してしまいます。例えば、施錠したかどうかで不安になり何度も鍵を開け閉めする、頭を床に打ち付け血が出ていても止めることなく棚の下を覗き込む、紙が破れるまで消しゴムで字を消す、ノートが黒くなっても定規で線を引き続ける、など。発症のタイミングや強迫行動の内容によっては生命に危機を及ぼすこともあります。原因の1つは恐らく両親からの期待に応えられない自分への怒り、苛立ちだったのだと思います。両親は病院に連れて行ってくれましたが、当時はまだ「思春期精神疾患」に対しての理解は乏しく、私のそれも単なる精神疾患として処理され、結果、家族と引き離され、窓には格子、扉は二重に設置された病棟への入院を余儀なくされました。

そこには同じような年代の子どもが何人もいました。症状は様々でしたが、それぞれが精神的な問題を抱えていたことは確かです。ただ、仲良くしていた高校生のお姉さんが退院後に亡くなったことを聞いたとき、入院することに意味があるのかと疑問を抱きました。

薬やカウンセリングが功を奏し、暫くして私は復学しました。軽度ではあるものの依然として強迫行動が出ることはありましたが、友人にも恵まれそれなりに楽しく高校生活を送っていたある日、そんな自分を揶揄った（と私が勘違いしてしまった）同級生に、元々の喧嘩早さから殴りかかってしまいました。必死で私を制止する友人たち。場が落ち着いた頃、彼らに初めて自分が「強迫性障害」であること、加療中であり薬を服用していることを打ち明けました。嫌われるのではないかと、怖がられるのではないかと、これまで通りの付き合いが出来なくなるのではないかと、震えながら涙ながらに話した私に、その友人たちは「そんなこと気にしない、気にならない」と一蹴してくれました。意外なほどあっけらかんとした彼らに、私は大きく救われました。以後、症状は快方に向かうことになります。あの時、私が必要としていたのは、この友人たちのように自分の話を否定せず最後まで聞いてくれる存在でした。そして、同じような想いを抱え、苦しみ、話せる場所や聞いてくれる相手を探している子どもたち、学生が、今もきっとどこかにいるはずです。

私がこの特定非営利活動法人で展開する3つの事業は、どれも「居場所づくり」がテーマです。高津区内に不足している子ども食堂、教育委員会から要請もあった寺子屋、そして、もう1つ、人材研修マネジメント事業は、生きづらさを抱えた児童や学生が保護者から独立して新たな世界に踏み出し、新たな出逢いから新たな居場所を見つけるために必要な土台となります。

どんなに苦しいことがあっても投げ出さなくなっても、人との出逢いで凡そのことは解決します。私自身がそうであったように、未来ある若い方々にもそう信じ生きられる場所を提供する。それが法人代表としての私の使命であると、強く思っております。

令和7年10月6日

法人の名称 特定非営利活動法人 GAIA.KAWASAKI

設立代表者 保科 卓也